

小児の肺炎球菌感染症の予防接種について

肺炎球菌による感染症について

肺炎球菌は、乳幼児の鼻咽頭に高い割合で定着する常在菌で、飛沫感染により伝播する小児の細菌感染症の主要な原因菌です。保菌者の全てが発症するわけではなく、抵抗力の低下や粘膜バリアの損傷などにより、菌が体内に侵入すると発症します。

疾患としては、髄膜炎、敗血症・菌血症、肺炎、中耳炎など多岐にわたりますが、特に髄膜炎をきたした場合には、2%の子どもが亡くなり、10%に難聴、精神の発達遅滞、四肢の麻痺、てんかんなどの後遺症を残すと言われています。また、小さい子どもほど発症しやすく、特に0歳児でのリスクが高いとされています。

肺炎球菌ワクチンについて

肺炎球菌による感染症を予防するワクチンです。子どもの侵襲性肺炎球菌感染症を引き起こすことが多い13の血清型(1、3、4、5、6A、6B、7F、9V、14、18C、19A、19F、23F)を選び、各血清型の肺炎球菌莢膜多糖体に、無毒性変異ジフテリア毒素(CRM197)を結合させて混合したものを、リン酸アルミニウムアジュバンドに吸着させて不溶性としたワクチンです。

副反応

副反応としては、局所反応として紅斑、腫張など、全身反応として主なものは発熱が認められています。重い副反応として、非常にまれにアナフィラキシー、けいれん、血小板減少性紫斑病等が報告されています。

対象者及び接種スケジュールについて

生後2か月～5歳未満(5歳の誕生日の前日まで)
※対象年齢を過ぎると、公費での接種は受けられなくなります。



接種時に持参するもの

- ① 小児用肺炎球菌ワクチン接種予診票
- ② 母子健康手帳(接種歴を確認するとともに、予防接種を受けたことを記録します。)